

妊孕性保険適用申請にあたって一乳がん経験者の立場から

愛知県名古屋市 藤岡 花子（匿名）

お願いの要旨

多感な高校時代に、母を卵巣がんで亡くした私は、自身も漠然とした不安を抱いていました。特に母が亡くなった 40 代を前に、自身の体にも注意深く目を向けるようになっていました。

仕事と育児と家事、それに老いた父のお世話…。目が回るほど忙しい中で、乳房のしこりに気が付いたのは、39 歳。一人娘の春子の小学校卒業目前でした。不安を覚え近くの病院で受診したところ、そこは乳がん専門病院。人格的にも医療技術の上でも優れた院長先生による執刀で、39 歳、45 歳と発症した乳がんを乗り越えることができました。

娘も大学から大学院と進み、ようやく暮らしに落ち着きが見えて頃、夫が急性リンパ性白血病を発症。その頃、電話相談で私たちを支えてくれたのが、今回の代表者である橋本明子さん。以来、適正な医療情報提供活動を展開する血液情報広場・つばさの橋本理事長の活動に共鳴し、微力ながらお手伝いさせていただくことになりました。

娘の春子が乳がんを発症した時も、的確なアドバイスをいただいたのが橋本さんです。春子の遺伝性乳がんへの治験参加希望（結果的には、参加できませんでした）、私も遺伝性乳がんのカウンセリングを受け、遺伝子検査で遺伝子変異が見つかりました。

春子の発病当時、橋本さん率いるつばさはちょうど「AYA 世代のよりよい治療」も活動の一環でした。中でも、つばさの理事を務める後藤千英さん（MDS を発症し骨髄移植前に、卵子凍結）が妊孕性について、つばさのフォーラム等で強く訴えていたことは、まさしく娘の春子が抱えている問題でした。辛い治療生活を支えた「希望」は卵子凍結だったと…。

そんな時、「妊孕制保険適用申請」を提案されたのが橋本明子さんでした。日本人の誰にも、病気や結婚・非婚にかかわらず、妊娠・出産に向け、扉を開くべきだと…。

橋本さんの主張に強く心を揺さぶられた私は、「妊孕性保険適用申請」にあたり、「私の経験が少しでもお役に立つのなら」と春子の同意を得て、記録を提供することとなりました。

主旨等をご賢察賜りますようお願い申し上げます。

以下にお願いに至るまでの経緯と詳細な趣旨とを申し述べます。

Profile

藤岡 春子

名古屋市在住 38 歳／女性（2019 年 6 月現在）

未婚

自動車関連メーカー勤務

病歴

2017 年 12 月 1 日：両側乳がん発症

(遺伝性乳がん／左右ともⅢ期A)

2017年12月18日：採卵；卵子保存

12月19日；術前化学療法開始、6か月間実施

2018年 6月18日：両側乳がん全摘手術

7月：術後化学療法、6か月間実施

2019年6月現在：ホルモン療法実施中

【発症までの背景】

娘の春子が乳がんを発症したのは、37歳を過ぎたばかりの頃です。祖母を卵巣がんで亡くし、母である私も2度の乳がん経験者、父は急性リンパ性白血病で死亡。

がん治療を身近に体感した成長期を過ごしていました。

特に父親の血液疾患の治療は凄絶で、その血を引いているからと、造血器腫瘍については敏感になっていたようです。会社が行う健康診断でも、血液の検査値についてはチェックに余念がなく、白血球の数に一喜一憂。ところが、女性器腫瘍の家系にもかかわらず、母である私も、そして春子も、なぜか気に留めることはありませんでした。

会社が実施する健康診断の乳がん検診は40代以上から必須。30代まではオプションということも、乳がんの早期発見につながらなかった要因の一つだと思います。とはいえ、遺伝性乳がんについての早めの対策は、自明の理です。

根治治療を終えた今でも、「なぜ、気が付かなかったのだろう」と悔やむばかりです。がん治療の治癒率が高まったとはいえ、やはり「がん」はその後の人生を大きく左右してしまうからです。

【乳がん告知】

娘の春子が乳房に異変を感じたのは、告知を受ける半年前あたりだと思います。

私が治療した乳がん専門病院は、民間でありながら名古屋市でも有数の実績を誇る名門病院です。手術・入院、経過観察まで一貫して行う病院でしたが、2016年以降は、診察専門のクリニックへと業態を変更。とはいえ相変わらず患者からの信頼は高く、1カ月先まで予約を待たねばいけない状態でした。

母である私を心配させまいと、春子は私に内緒でその乳がん専門クリニックの予約を取り付けたようです。

不安を抱えながらも検査にこぎつけたのは、2017年11月21日。両側乳がん告知を受けたのは、12月1日のこと。告知した医師は病状の深刻さを伝え、愛知県がんセンターへの紹介状を書き、検査データを用意してくれました。以後、愛知県がんセンター乳腺科で治療を始めることになります。

乳房の異常を感じながらも、検査を逡巡したこと、やっと決意しても、迅速に検査にこぎつかなかったことなどが、発見を遅らせた大きな理由ですが、「起きてしまったことを悔いても始まらない」と春子はいいます。

それよりも、この事実をこれからは生かすことは大切だとも…。

【卵子保存に向けて】

2017年12月4日。愛知県がんセンターでの初診。出迎えてくれたのは、春子と年齢の近い小柄な女

性医師でした。民間の乳がん専門クリニックの診断のとおり、両側乳がん。病態や全身への転移等については、MRIやPET検査などの結果を待つことにはなりますが、術前化学療法を6カ月行った後、手術。術後は、手術中の病理検査にもよりますが、化学療法または放射線療法を検討することになる、という治療計画でした。

治療計画に次いで、女性医師が口にしたのは、卵子凍結でした。卵子凍結を行う施設をいろいろありますが、その中から、名古屋大学医学部附属病院、岐阜大学医学部附属病院、そして民間で実績を誇る病院を一つ紹介していただきました。愛知県がんセンターはがん治療に特化した施設のため、卵子凍結は行っていないからです。

術前化学療法の開始予定日は、12月19日。初診日から15日しかありません。女性の生理には周期があるため、この15日の間に果たして、採卵ができるのかという、大きな課題もありました。

春子は、病気や治療への不安を抱える中、それでもその15日間にかけてみたいと訴えました。

37歳になるまで、春子には結婚への機会はありましたが、「子どもを産みたいですか」と問われれば、「仕事との両立が果たしてできるのか」と気後れ気味でした。

しかし、健全な女性の機能を失うかもしれないその時、やはり子どもを持つという可能性は残しておきたいと、春子は切望しました。

卵子凍結が、春子を待ち受ける辛い治療を乗り越えるための希望とも思えました。

「赤ちゃんを産む可能性を、病気で奪われたくない」

春子の気持ちを察した女性医師は、「子どもを産みたい、という気持ちは大切です。がんの場合、進行は比較的ゆっくりのため、化学療法を遅らせることもできます」

化学療法を遅らせるか否か、採卵ができるか否か。そんなことよりもまず、採卵をしてくれる病院を決めなければなりません。民間クリニックへの紹介状を握りしめ、帰宅後、電話で予約を申し込んだところ、「施設一新のため、しばらく休業します」のとのこと。

途方に暮れました。

【卵子凍結に至る経緯】

私は、血液疾患の医師には多少のつながりがありました。夫の闘病期につないだネットワークです。早速血液内科医に電話で相談したところ、

「私見ですが、まず、命をつなぐ治療を優先するべきです。卵子凍結には既婚者もしくは結婚予定者を前提としている施設が多く、それ以外の採卵については、倫理委員会の判断を待つことが多いです」との旨。

目の前で、シャッターを下ろされる感はいがめませんが、それでも春子は採卵への可能性を見つけようと必死でした。愛知県がんセンター、名古屋大学医学部附属病院に電話で連絡を取り、採卵への道がないものか、と訴えました。

外来の時間は終わってしまった夕刻。医師不在のまま、対応してくれたのは、それぞれの施設の看護師でした。ともに先端医療を行う愛知県内屈指の先進病院です。切迫した患者があまた待つ先進病院が果たして、飛び込みの患者の採卵に応じてくれるのでしょうか。

しかし、看護師二人が、春子の希望をつないでくれました。

名古屋大学医学部附属病院の看護師は、「予約が詰まっていますが、なんとかその合間に受診していただ

くようにします。明日来院してください」

愛知県がんセンターの看護師は、「民間病院への紹介状を名古屋大学への紹介状に書き換えましょう。明日一番で来院してください」

春子は幸運です。愛知県という比較的恵まれた医療圏に住み、温かい女性医療者たちのサポートで、採卵への道が開かれたのです。

【採卵と費用】

12月5日から16日まで通院した後、18日には採卵のための手術を実施。10個中、8個が正常な卵子で、以後、名古屋大学附属病院で保存されることになりました。

今回は、名古屋大学医学部附属病院の臨床研究と対象となり、費用も総額30万円弱（交通費込み）と、他に比べ負担は軽くすみました。

春子が勤務するのは、一部上場のメーカー。所得も同世代女性よりは多く、高額医療制度とは別枠の企業独自の医療費補助制度もあり、傷病休暇等の福利厚生制度も充実しています。

採卵費用の工面に頭を悩ませることもなく、また休暇も保障されていました。

やはり、ここでも春子に幸運の女神がほほ笑んでくれました。

18日卵子凍結、19日から化学療法と、綱渡りのような日々を乗り切り、ついに治療が始まったのです。とはいえ、外来治療の暮らしは不安ばかりが募ります。治療中の生活などについて戸惑う春子は、同じ世代の同病の患者の声を求め、さまざまな患者会などに参加してきましたが、そこで聞こえてくるのは、「休めない」「治療費が不安」というAYA世代の女性たちの声。

いつ終わるともしれない治療に、そしてかかる費用に、多くの不安を抱える女性たちが、果たして多額な採卵費用を工面することができるのでしょうか。生きる希望ともいえる「出産」への道は、閉ざされてしまうのでしょうか。

治療と仕事の両立が叫ばれる今、そして、次代を担う「宝」ともいえる子どもたちのことを考えた時、「卵子保存」の保険適用さえあれば、彼女たちにも、そして未来にも、「希望」の灯は、輝いてくれることでしょうか。

【現在】

術前化学療法6カ月を終え、全摘手術を実施。幸い、全身転移は見られたかったため、手術という根治療法にこぎつけることができました。

手術の時点で右乳房のがん細胞は0、左もわずかを残すのみ。術前の化学療法は奏功したといえます。そして、遺伝性乳がんという性格上、術後6カ月の化学療法を追加。現在はホルモン療法実施中です。

乳がんは女性ホルモンが影響していると考えられており、ホルモン療法中は、妊娠は望めなません。しかし、同性代の乳がん患者たちは、一時断薬し、出産後のホルモン療法を予定するという患者もいるそうです。

遺伝性乳がんという病態から、卵巣摘出も推奨されていますが、とりあえず治療がひと段落した今、妊娠・出産の可能性を残すため、卵巣摘出は今後の課題としたいと、春子はいいます。

名古屋大学医学部附属病院に保存されている春子の8個の卵子。

「凍結した卵子は、永遠に採卵時の38歳のままです」との医師の説明は、今でも春子の心のよりどころになっているようです。（了）